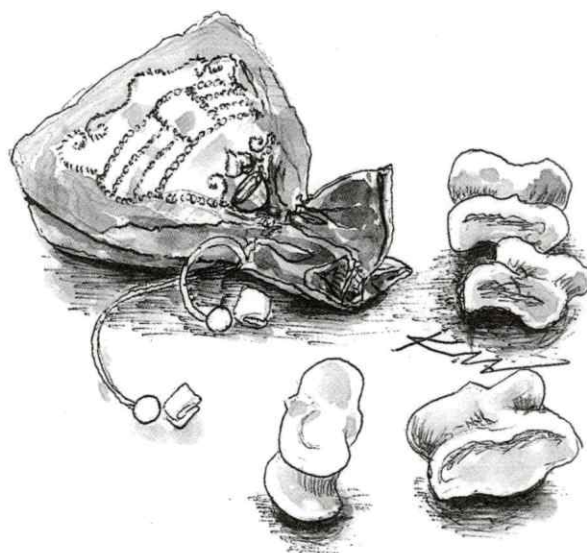


第14回  
高津全国俳句大会  
入選作品集



カット 佐藤和行

2021年11月14日

川崎市「てくのかわさき」  
ホール

主催：高津区文化協会

共催：川崎市・川崎市教育委員会・高津区役所

後援：神奈川新聞社・神奈川県現代俳句協会・高津観光協会

# 入賞

高津全国俳句大会大賞

丹沢に洗ひざらしの夏の雲

相模原市 小林ひろこ

日本中どこにでもある夏の雲ですが、ことに丹沢山地にむくむくと出ている雲は格別だと感じ、それを「洗ひざらしの」と表現した句で、清潔ですこやかな夏の雲が見えてきます。

(宇多喜代子)

川崎市 市長賞

新涼や使ひ勝手のよき遺品

紀の川市 中島 走吟

「使ひ勝手のよき遺品」とは何でしょうか。母の包丁、祖母の箒。それとも父の蠅叩き、祖父の硯。

考えてゆくほどに愛惜の情が伝わってきます。それを日常の品として使い続けていく日々が作者の心を癒やしてゆくのでしょうか。「新涼」という季語もまた心の癒やしです。

(夏井いつき)

川崎市教育委員会賞

紅葉かつ散るや太郎の白鳥碑

横浜市 小嶋 芦舟

「紅葉」だけでなく、「紅葉かつ散る」という季語は長く、一句にうまく取り込んで詠むのはなかなか

むずかしい。紅葉がさかりの時、一方ではもう散っているのだ。そのあたりに岡本太郎の「白鳥碑」がある。うまく詠めている。

(石 寒太)

神奈川県新聞社賞

ものの芽や地球こんなにやはらかし

登別市 袖山 功

春、土を割って「ものの芽」が5ミリ、1センチと出てきます。その感動を「地球」という大きな言

葉で表現しました。

(宇多喜代子)

高津区 市長賞

ガマンすることのみ多しシャボン玉

船橋市 杉 まろん

子どもは自由奔放でありながら、一方「ガマンすること」も多い。が、気分転換するのものはやい。何

でもなかったようにもう「シャボン玉」遊びに興じ、明るくふるまっている。その差が出ている。

(石 寒太)

高津観光協会会長賞

桜桃忌沖より三角波無限

相模原市 小沢 真弓

太宰の忌日に眺める海でしょう。遙かから押し寄せる三角は天気の不慮の予兆でもあり、心を騒がせるようでもあります。「無限」の一語がとどまることない波の姿と作者の心の波立ちを表現。「桜桃忌」の海に立つ心情に心うたれます。

(夏井いつき)

高津区文化協会会長賞

灼けて着く巡廻バスの横つ面

福井市 村田 淑子

炎天をぬけて来た巡回バス。あちこちの村落をめぐって着いたのでしょうか。「横つ面」という措辞は灼けきったバスの少し剥けた側面を見事に映像化しています。バスから降りる人乗る人の姿からは、夏の村の生活も見えてきます。

(夏井いつき)

プラチナ俳句大賞

訪ふ度にふるさと縮む秋の風

川崎市 川邊 和子

人の姿がない、子どもの声がない。建物の様相が変わる。そんなふるさとの変わりよう。俳句セオリーとしては、ここに「秋風」を置かない方がいいのですが、他季の風は、この気持ちを引き受けてくれませんか。

(宇多喜代子)

ジュニア俳句大賞

そよ風を乗せてるタンポポの綿毛

沼田市 須田 愛莉

タンポポの綿毛が春のそよ風に少し揺れている。それが「綿毛がそよ風を乗せている」と見えたんだ。いいところを見たね。その目が素晴らしいし、その一瞬を五七五にするのが俳句。次の一瞬は、風に綿毛が乗ったかも。

(谷村鯛夢)



(石 寒太)



# 特選

宇多喜代子 選

足裏に大地の厚み 杉落葉

相模原市

鈴木香穂里

踏んでいるのは杉落ち葉の積もったところでしょうか。ふわりとした足裏の感触を大地の「厚み」と感じた句。

ふるさととの単線沿ひの花菜かな

千葉市

高橋 光枝

「ふるさと」「単線」「花菜」が郷愁をそそるお定まりのような句ですが、やはり故郷を表現するのはこのような句。作者一人のふるさとではなく、これはアナログ日本人の「ふるさと」として貴重です。

夏井いつき 選

瑠瑠の看板を過ぎ海の家

行橋市

高山 桂月

懐かしい昭和の広告看板でしょうか。笑顔の看板の先は海の家。これから始まる海辺の楽しさが一歩一歩高まります。まるで短い動画を見ているような一句は、過ぎ去った夏のひとときをも想像させてくれます。

高らかに箸洗う母祭りの夜

川崎市

花崎 暁子

「高らかに洗う」とは、と一瞬思います。祭の客で賑わったあとの厨でしょうか。片付ける母にもまだ祭の高揚が色濃く残っているのでしょうか。それが、「高らかに」の一語に表現されています。箸を洗うシャツシャという音がありありと聞こえてくる祭の夜です。

プレハブの夏等間隔の室外機

川崎市

朱 契太郎

まだ新しい仮の住宅に等間隔に置かれたエアコンの室外機。工事現場の景かもしれませんが、「プレハブの夏」という措辞には仮設住宅に暮らす人々の詠嘆がこもっているようにも感じられます。薄い壁一枚隔てこの夏を乗り切ろうとする人々の暮らしが想われる作品です。

石 寒太 選

ホスピスへ海ひらけ来ぬ柚子の花

川崎市 市川 洋子

死期迫った患者のための医療施設。そこで人生の終わりを迎えようとしているのだ。そこは海に向かっている高い丘の上。庭には柚子の花が咲き、ほのかな香りがただよっている。明るい日が差し、こころ安らかな朝なのかも知れない。「柚子の花」がとてもいい。

目の高さ風の高さや赤トンボ

国東市 吾 亦 紅

「目の高さ」と「風の高さ」の視線の前を風が吹いているのである。秋、赤トンボが目に入る。上五から中七にかけてのリフレインのリズムが心地いい。俳句は韻文。律を整えることが大切。色彩もいい。

先頭のあるやなしやの蟻の列

町田市 井手 和子

蟻が列をつくって進んでいく。どこが先頭でどこが後尾なのか。中七の「あるやなしや」の表現がよかった。本当に蟻の列はどこが「先頭」なのか、分りにくい。あたりまえの非凡。

しやぼん玉喧嘩のあとで飛ばしけり

川崎市 田村 恵子

子どもたちがふとしたことから「喧嘩」になってしまったのであろう。でもすぐに仲なおり。「しやぼん玉」に興じて、先ほどの喧嘩があったことなど、すっかり忘れてしまっている。そこがみえてきていい。



(※宇多喜代子特選一句は作者が作品を取り下げられました)

# 秀作

宇多喜代子 選

つつぬけの空の高さや観覧車  
まだ音の出る口笛よ夜の秋  
走り根の先の走り根木下闇  
風光る初めて使う定期券  
土匂ふ父の形見の農日誌  
夏潮のゴジラのやうな波頭  
父還る雷も光も携えて  
退屈といふも幸せ草の花  
夕風や犬走りくる曲り道  
新涼や使ひ勝手のよき遺品

川崎市 歌代 靖枝  
川崎市 たむら 葉  
調布市 万木 一幹  
川崎市 矢野 祥子  
足立区 森山 博士  
八王子市 吉田 マチエ  
大和市 高畑 ミツエ  
松山市 井上 由美子  
目黒区 池田 正江  
紀の川市 中島 走吟

夏井いつき 選

平凡な夜を残して祭果つ  
ずれてしまふラジオ体操つるもどき  
濃き影が削る日の道蟬時雨  
葡萄丸くワルツの円く月の夜  
花南瓜思ひ出したる教師の名

加茂市 織田 亮太郎  
相模原市 江成 和子  
鎌倉市 清住 美朝  
目黒区 池田 純子  
流山市 伊藤 航



花南瓜思ひ出したる教師の名

目黒区 池田 純子  
流山市 伊藤 航

消滅部落北緯四十度の草いきれ

相模原市 小林 ひろこ

十薬茶注ぐシエイクスピアの耳

福岡市 有馬 育代

多摩川を斜めに春の雷来たり

調布市 万木 一幹

冬堇マザーテレサの名を聞く日

川崎市 平松 茜月

長雨やコンロのベリージャムに猫

福岡市 田村 佳織

石 寒太 選

夏木立陶魂庄司眠りるる

川崎市 日下部 明彦

畑より戻りし夫の背の蟻

多治見市 平山 圭子

滴りを打つ滴りのありにけり

下関市 木嶋 政治

寿限無寿限無と唱へ炎暑を生きてをり

相模原市 小沢 真弓

不許葦酒入山門白芙蓉

川崎市 森澤 義二

子の未来乗せてふうはりしゃぼん玉

川崎市 福嶋 照子

白靴夏夏岡本太郎美術館

川崎市 百田 登起枝

ニヶ領のいのちの水や稲の花

川崎市 小川 淳子

しやぼん玉百歳越えし息を吐く

相模原市 藤田 ミチ子

お茶漬に新香八月十五日

熱海市 天野 幸光

# 佳作

君はまだ飛べるよと蟬空へやり	天の川施設の母に声とどけ	本当は淋しがりやの蠻虫	指折りて子等の句作り星まつり	燕の子空の高さへつながれり	面影のかの子観音凌霄花	青嵐円筒分水八十年	つつぬけの空の高さや観覧車	ぼたん雪文字追ふごとく眺めをり	錦絵の大山詣で街薄暑	空豆を剥く夫の手の白さかな	旅立ちの施設の母よ百合の花	太陽を見つめ向日葵大きな眼	戻り来てこの指とまれ盆とんぼ	濡れてゐる鬮牛の眼や青嵐	鶏小屋の声くぐもりて梅雨兆す	鶏頭の頭の重たげや癌検診	少年は隠花植物夏の月	麦の波死没者名簿の一ページ	村すべて同じ姓なり瓜畑	帰省子を先づ鶏の迎へけり
川崎市 豊里 晴美	川崎市 廣田 則子	大田区 桜庭 佳子	川崎市 石関 武之	川崎市 千葉 楓子	川崎市 小川 淳子	川崎市 小川 淳子	川崎市 歌代 靖枝	川崎市 竹内 加代子	川崎市 河野 幸子	川崎市 池上 美栄子	川崎市 東 久美子	町田市 小林 絹子	福岡市 江藤 豊子	川崎市 坂本 巴	長岡市 大森 千代	宝塚市 福島 令子	福岡市 永田 寿美香	大分市 小野 道山	高崎市 齋藤 宏子	川崎市 鈴木 経彦



輪郭	秀野忌	どの人もわが子に見えるマスク顔	黄泉からの風たつぷりと木の根明く	柿若葉ガラスの瓶の貯金箱	追伸に接種二度済む天の川	白靴や休みたくなる椅子ひとつ	終戦日の円筒分水鴨涼し	吹き抜ける櫛大樹の青嵐	岩木山目覚め菜の花蝶に化す	炎昼や足場に動く足袋の裏	梅雨空の独り回れる観覧車	油蟬石を刻みし庄司の墓	梅が香に包まれ夜の独歩の碑	母の日の施設にピンクパジャマかな	退屈がタンポポの絮吹いている	まだ音の出る口笛よ夜の秋	巴 <sup>バル</sup> 爾 <sup>カ</sup> 幹の地は暗がりか星月夜	曲がり家の石うす一つ歳用意	名月や弔ひの酒のおむばかり	ふはふはふは寝癖の髪 <small>の七五三</small>	君はまだ飛べるよと蟬空へやり
福岡市	流山市	伊勢原市	安曇野市	川崎市	相模原市	川崎市	川崎市	八街市	川崎市	横浜市	港区	川崎市	川崎市	川崎市	町田市	川崎市	文京区	川崎市	川崎市	川崎市	川崎市
有馬	伊藤	塚原	穂苺	青木	鶴田	清水	松倉	菱木	高木	三枝木	浮川	川田	川田	須山	江成	たむら	角岡	福元	宮内	島海	豊里
育代	航	令子	真泉	正子	静枝	美代	典子	良一	岳	美恵	初子	潔	潔	小夜子	文子	葉	博子	螢	久子	尚子	晴美

月の出を待ちてひとりの鬼やらひ	世田谷区	古川	夏子
木の芽どき我に流れる蝦夷の血	横浜市	石川	夏山
金銀のテープ絡まる案山子翁	松山市	ひで	やん
自墮落にあれば虚空の梅雨の月	筑紫野市	渡辺	葉月
水論ありしいま花影の分水筒	川崎市	橋本	經子
涼風や丘に並びし椅子七つ	川崎市	白石	順子
煮え切らぬ男と夏のしやぼん玉	松戸市	須藤	かよ子
膝高く秋の彼岸の畔を行く	渋谷区	駿河	兼吉
外灯に浮かぶ桜や通夜の家	藤沢市	山之口	春美
碑は秋天へ迫り上がりかの子の碑	八幡浜市	松本	伴子
父の血の濃くて嗤えり茄子の馬	横須賀市	渡辺	初子
一山を揺るがす僧の大きくさめ	川崎市	飯川	三無
走り根の先の走り根木下闇	調布市	万木	一幹
終戦日財布の中の子の写真	和光市	前田	拓
「黒い雨」結審したり広島忌	水戸市	島	洋子
原爆忌目玉ふたつの目玉焼き	渋谷区	市ノ瀬	遙
風わたる庄司好みの苔の花	川崎市	小熊	未央
母の手と団栗ひとつ谷戸の風	港区	浅井	理恵子
「月 <sup>ルナ</sup> 」といふ猫の瞳の秋満月	港区	浅井	理恵子
ひぐらしや朝のフルート「母の声」	大和市	保田	昌男
多摩川の橋いくつ潜りて去ぬ燕	船橋市	斉藤	駿馬

多摩川の橋いくつ潜りて去ぬ燕 船橋市 斉藤 駿馬

南天の明日信じる花白し 伊豆市 安藤 治

帰省して富士見ゆる窓まづ開き 川崎市 助川 ゆかり

スケボーの子に国境無し夏の蝶 川崎市 上野 浩

またひとつ予定の消えて秋はじめ 川崎市 村田 和信

みんなの羅生門より昼寝覚め 川崎市 有馬 日出子

この国の形の初め稲の秋 武蔵野市 夏目 重美

撫子や沖に空母の見ゆる丘 船橋市 小見戸 實

望郷の銀河遠流の後鳥羽院 横浜市 三好 康子

父の日や蛸焼きくるりまたくるり 港区 峰村 浅葱

母宛ての遺髪 八月十五日 川崎市 影山 亥史郎

少年の画帖青々円き水 川崎市 松浦 めぐみ

白南風や吾が人生の舵を切る 福岡市 白水 朝子

目当てなく振る夏帽子遊覧船 松山市 岡本 士郎

退屈といふも幸せ草の花 松山市 井上 由美子

君ジャナキヤダメダツタンダだちや豆 川崎市 伊藤 聖子

一羽の白鷺一幅の柳瀬川 志木市 綿引 康子

敗戦忌玻璃戸に赤き蛾の目 船橋市 前島 きんや

玄冬の原風景やいつも父 調布市 稲見 寛子

ものの芽や地球こんなにははらかし 登別市 袖山 功

新涼や使ひ勝手のよき遺品 紀の川市 中島 走吟

帯締め硝子細工や江戸の夏 中央区 金原亭 馬生

軋む世に耳立ててをり藪椿 中央区 浅川 弘子